

ZOCALO 2022 2 ▶ 3

ZOCALO = ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

扉は(どのくらい)開いている？ 美術館とコレクションの40年にまつわるあれこれ

企画展 開館40周年記念展
扉は開いているか—美術館とコレクション1982-2022
2022年2月5日(土) ~ 5月15日(日)

埼玉県立近代美術館は、1982年11月3日、「開館記念展 印象派からエコール・ド・パリへ その熱情と苦悩」とともに開館しました。2月5日より開幕する「扉は開いているか—美術館とコレクション1982-2022」では、2022年に開館40年を迎える当館そのものに焦点を当て、美術館の活動とコレクションを紹介します。

当館はこれまでに約3,900点の作品資料を収蔵してきました(2022年1月現在)。1971年に開館した埼玉県立博物館の近代美術部門の収蔵作品と活動を引き継ぎ、埼玉県ゆかりの作家の作品を核にしなが、同時代も含む多様な時代・ジャンルの美術作品を収集し、コレクションを拡充させてきました。体系的なコレクションを形成し、適切に保存管理を行うことは、美術館の根幹をなす活動です。それと同時に、コレクションの形成は、調査研究や展覧会、教育普及といった美術館の他の活動と不可分であるといえます。

その一例として、当館の収蔵作家のひとりである瑛九(1911-1960)に注目してみましょう。油彩、フォト・デッサン、版画、文筆、美術運動への参加などジャンルを越境した活動で知られる瑛九の調査研究と作品収集は県立博物館時代から進められ、近代美術館開館後もご遺族や関係者のご協力・ご寄贈によって、フォト・デッサンや版画作品、制作に使われた型紙資料や旧蔵書など関連資料が収集されました。近年でも、吹き付けの手法が用いられた油彩作品《手》や、所蔵者よりご寄託いただいた晩年の最重要作品《田園》など新たな作品が加わり、多角的にその活動を捉え得るコレクションを形成しています。それとともに、「瑛九とその周辺」(1986年)、「光の化石—瑛九とフォトグラムの世界」(1997年)、「デモクラート1951-1957—開放さ



れた戦後美術」(1999年)、「生誕100年記念 瑛九展」(2011年)など、当館では作家とその周辺の動向を様々な角度から紹介する展覧会を継続的に開催しています。こうした展覧会の開催は、作家の画業を広く紹介する機会になるとともに、新たな作品の調査や収集にも繋がり、美術館の活動とコレクションの幅を豊かに広げるきっかけとなります。

また、瑛九を核としたコレクションは、作家の外側にも網目を広げています。当館の写真分野は、マン・レイやラスロ・モホリ＝ナジ、杉浦邦恵など、フォトグラムの手法を用いた作品を重点的に収集しています。他にも、デモクラート美術家協会の作家や山田光春など直接関係のある作家の作品や資料に加えて、例えば1970年代から80年代に瑛九を重要作家と位置づけて活動を展開した版元組織・現代版画センターのエディション作品を近年ご寄贈いただいたように、瑛九を起点に幅広い文脈のコレクションを形作っているのです。

展覧会や調査研究を通して収蔵作家や作品を常に新たな視点で捉え直すことによって、異なる作品同士が思いがけない文脈で交点を結び、コレクションは豊かな広がりを生み出します。本展覧会では、こうしたコレクション形成の過程にも目を向けながら、美術館の活動を紐解き、当館がこれまで築いてきた土台

について考えます。展覧会では、「近代美術館の原点—コレクションの始まり」、「建築と空間」、「美術館の織糸」、「同時代の作家とともに」という4章構成で、地域の美術の収集、黒川紀章設計による美術館建築、美術館の活動と分かち難く結びつきながら成長するコレクション、コミッション・ワークなど様々な視点から埼玉県立近代美術館の40年間を振り返り、これからの美術館の役割や課題を展望します。

美術館は、過去から現在までに多くの人々によって長い時間をかけて蓄積されてきた文化という資源を未来に受け継ぐという使命を担っています。展覧会タイトルには、作品の持つ豊かな意味を開く場所であり、様々な表現に触れることによってそれぞれの「わたし」の視点を開く場所でもある美術館の可能性を改めて問い直したいという意味を込めました。展覧会の準備の過程で発掘された、美術館の40年間にまつわるアーカイブ資料もご紹介しますのでこの機会をお見逃しなく！(S.H.)



- 1 埼玉県立近代美術館開館記念式典、1982年11月2日
- 2 瑛九《手》1957年
- 3 瑛九 型紙資料(右下の丸い型紙等が《手》の制作に使われていると推測される。)
- 4 黒川紀章《埼玉県立近代美術館のためのスケッチ・ドローイング》1979年 株式会社黒川紀章建築都市設計事務所蔵
- 5 宮島達男《Number of Time in Coin-Locker》1996年

末松正樹 〈ダンス, ダンス, ダンス〉

MOMASコレクション第4期
2022年2月12日(土) ~ 4月24日(日)



MOMASコレクション第4期で特集する末松正樹(1908-97)は、第二次世界大戦をまたぎ日本とフランスで活躍した油彩画家です。陸軍士官の家庭に生まれた末松は、父親の転勤にともない、新潟・秋田・朝鮮半島の春川・宮崎など各地を移る幼少期を過ごしました。のちに異国の地に溶け込み、困難な状況を生き抜くたくましさは、こうした流転的な環境につかわれたのかもしれない。

10代の頃から美術や音楽、文学への関心を持ち、絵画の腕はほぼ独学で磨きました。19歳のとき映画『聖山』で、当時舞踏家としても名をはせていたレニ・リーフェンシュタールの踊りを見て感動、これがドイツの前衛舞踊ノイエ・タンツとの出逢いとなりました。25歳で上京後は足しげくノイエ・タンツのスタジオに通うなど、ダンスに大きな熱意を注ぎます。

31歳になった1939年、末松はパリの日本舞踊展覧会での公演に従事するため、渡仏という大きな転機を迎えることとなります。公演終了後はさらにドイツでダンスを研究しようとするが、独仏開戦により状況は暗転します。日本への帰国命令が出るなかフランスにとどまることを選んだ末松は、一時期困窮生活に苦しみますが、翌年マルセイユの日本領事館で職を得ることができました。

ドイツ軍の占領を受けていなかったマルセイユはまだ比較的平穏で、末松は休日に南仏各地をめぐり、友人と展覧会を開催するなど、おだやかな時を過ごしました。しかし安息の日々もつかの間、1944年8月、連合軍の侵攻とともに、ドイツ軍支配下にあったマルセイユにも戦火が迫り、領事館はついに閉鎖に追い込まれます。末松と領事はマルセイユ在住の日本人男性の運転する車の中立国スペインへの脱出を試みますが、国境手前のペルピニャンでフランス側とドイツ軍の戦闘に巻き込まれてしまいます。ここで敵性国人と

して逮捕され、約1年間半の抑留生活を余儀なくされました。

行動の自由を奪われ先の見えない不安のなか、末松を支えたのは支給される紙と鉛筆による日々のデッサンでした。「無償に絵の中で舞踏がしたかった」という末松の言葉が語るとおり、連日のように描いたデッサンには、踊る群像が中心のモチーフとしてくり返し登場します。そこにはダンスで培われたリズム感やダイナミズムが生き生きと表現されています。時に狂おしいほどに緻密で、時にぼとぼしるような勢いのある描線からは、芸術の世界で自らを解き放とうとする作者の息遣いが聞こえてくるようです。

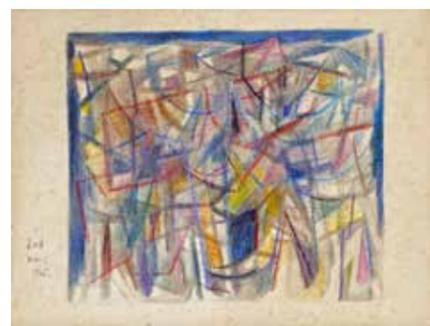
また文学にも関心があった末松は、デッサンにしばしば詩のような書き込みを添えました。

**過去への訣別！過去はつぶれた！一切はない。
生新なる人間として私の肉体のうちに生新な血は漲る！**

**「フーガ」わが生活は舞踏
神を謳ふ魂の歌。**

緊張なき1枚の作品も描くな！より激しく、より緊張して！

こうしたテキストからは、精神的な疲弊の中にあつた当時の末松が、芸術を糧に自らを奮い立たせていた様子がうかがえます。1946年3月に復員船で帰国するまで、フランスで波乱に満ちた前半生を送った末松。残された数百枚のデッサンからは、波難に臆することなく立ち向かい「踊り」続けた末松の情熱が伝わってくるようです。今回の展示では、近年ご遺族からの寄贈を受けた1950年代の油彩画3点と、ペルピニャン抑留時代のドローイング50点をご覧ください。(G.R.)



- 1 末松正樹《作品名不詳》(自画像) 1945年9月2日 紙、コンテ
- 2 末松正樹《作品名不詳》1945年3月8日 紙、鉛筆、色鉛筆
- 3 末松正樹《作品名不詳》1945年6月28日 紙、鉛筆
- 4 末松正樹《作品名不詳》1959年 カンヴァス、油彩